名古屋ハリストス正教会

なごや「聖歌」だより10月号2012

伝統って何？
＊正教礼拝の伝統を考える

今月の予定

聖歌練習 半田　10月11日(水)12時ごろから

名古屋10月8日代式後。毎聖体礼儀後のミニ練習も行います。

名古屋指揮当番

7日マリア松島　21日ピーメン松島　28日エレナ広石

4. 一致と多様性、聖神への信頼

その２　主教会議、

教会が問題に直面するとき、文字に書かれた規則や文書よりも教会に働く聖神の導きを信頼し、そこを任された主教(教会)が柔軟かつ現実的に判断しました。原則的にはすべての主教(教会)は対等で、総主教といえども他の主教区に権力を及ぼすことはできません。

教義など信仰上の重大な問題が起こったときは主教たちが集まって会議を開いて協議しました。主教会議の始まりは使徒言行録15章に記録されるエルサレムの使徒会議で、後の教会会議のモデルとなりました。主教会議は常に最高権威でした。会議の招集規模が全世界(当時は全ローマ帝国領内)であれば全地公会議、ある地域のみであれば地方公会議です。正教会では787年の第2ニケア公会議までの7回のみを全地公会とし、それ以後は東西教会の亀裂が深まり全地公会は招集されていないとし、新たな教義的決定は行われていません。

主教を戴くひとつひとつの教会が完全で公同(カトリック)な教会でありつつ、全地の教会が一つの信仰によって結ばれている緩やかな連合体としての教会相互のあり方は初代教会以来の教会の姿です。公会議は教会の一致を守る大切な話し合いの場でした。

第1回全地公会議(ニケア)を招集したコンスタンティン帝と出席した主教たちが、会議で採択された『信経』を持つイコン

礼拝の多様性

現代人は漠然と、キリスト教の礼拝には最初に一つの定式があってそれが分化していったと考えがちです。それは宗教改革以降の西方教会には当てはまるかもしれませんが、古代教会においては、事実は全く逆で、驚くほど自由で多彩な、教会ごとに異なる感謝の祈りが行われていました。2世紀の護教家ユスティノスは「司祷者(主教)は祈りと感謝を自分に与えられた力によって捧げ、人々は「アミン」と答えた(『第一弁明67章』)」と記しています。古代教会では今のような定式文ではなく、即興のことばで祈りました。しかし次第に異端的な内容が混入する恐れに気づき、いくつかの形に整理され、東方では最終的に4世紀のカッパドキアの主教聖大ワシリーによるもの、コンスタンティノープルの主教聖金口イオアンの名を冠するアンティオキアの伝統の二つの聖体礼儀に集約されてゆきました。聖体礼儀の形はほぼ共通で、違いはアナフォラの祝文(祈りのことば)にあります。

名古屋教会にある金口イオアン(左)と聖大ワシリーのイコン

また祝文同様、聖歌も初期には参加者が聖神の働きに促されるままに自由に即興で歌っていましたが、異端的な解釈が出てきたために主教から指名された(祝福を受けた)聖歌者に限るようになりました(ラオディキアの地方公会規則15条,364年)。 そのため聖書に収録されなかった歌はほとんど残っておらず、古い時代にどんな歌が歌われていたかはよくわかりません。唯一例外が『聖にして福たる』で、今も晩課に歌われています。

知って祈ろう―奉神礼は面白い

司祭　神や、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降せ

♪　　我等 すでに真の光を観(み)、天の聖神を受け、正しき信を

すでに「真の光」を見て「天の聖神」を受け、正しき信仰を得た･･･すべてはご聖体を受けることを前提に歌われています。神はご自身との交わりに私たちを招き、全く不相応であっても謙虚に贈り物を頂くことによって、救いがもたらされ、至聖三者への神を礼拝することが回復されました。

司祭　神や、願くは爾は諸天の上に挙げられ、爾の光栄は全地を蔽はん、我等の神は恒に崇め讃めらる、(高声)今も何時も世世に、

♪「アミン」主や、願くは我が口は讃美に満てられて 、我等爾の光栄を歌わん、爾我等に、神聖にして不死なる生命を施す爾の聖なる機密を領くるを許せばなり、祈る我等を爾の成聖に護り、終日爾の義を習わしめ給え 、「アリルイヤ」

アミン、主よ、私の口が(あなたへの)讃美に満たされて、私たちがあなたへの讃美を歌えるようになりますように。あなたは私たちに、神聖な、不死の生命を下さるあなたの機密を領聖することを許してくださいました。私たちをあなたの成聖のうちに守り、一日中あなたの正しさを習うようにさせてください。アリルイヤ

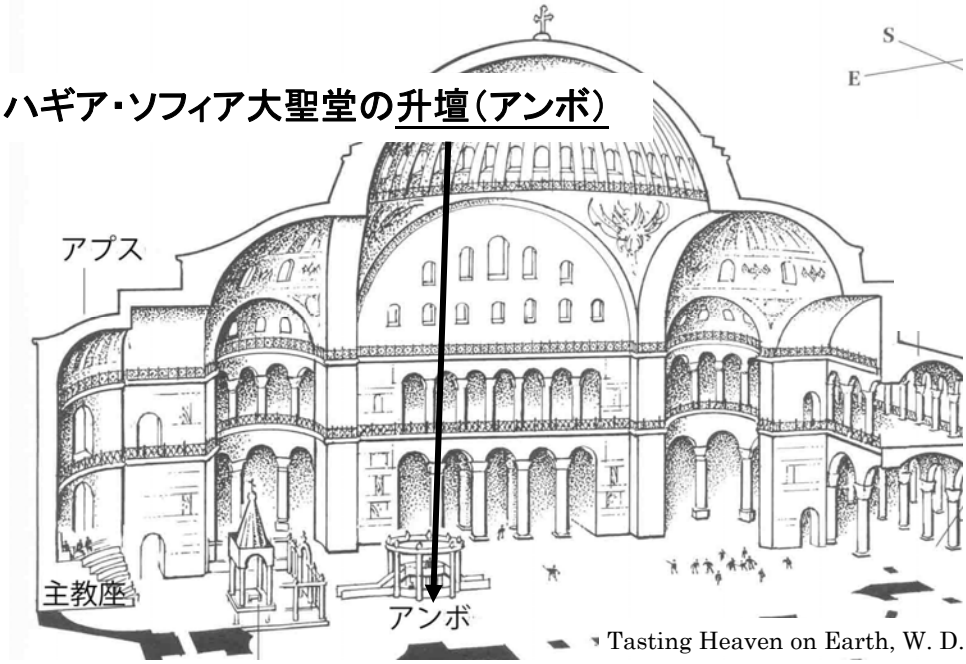
司祭　平安にして出ずべし

神の平安とともに、私たちはそれぞれ属する社会へ帰って行きます。ラテン語の「平安にして出ずべし」イテ。ミサ・エストはローマ・カトリックで聖体礼儀を表す「ミサ」の語源になったことばです。司祭は至聖所から聖所に降りてきて、升壇外の祝文を唱え、解散します。

聖体礼儀の最後の仕事はこの世への帰還です。司祷者が「平安にして出づべし」と唱え、至聖所を出てきます。聖体礼儀での最後の命じです。そこにいることがどんなに「すばらしいこと」か知っていても、(変容の主を見た)タボル山の山頂にとどまり続けることはできません。私たちは送り返されます。しかし今や私たちは「既に真の光を見、天の聖神を受け」ています。私たちはこの「光」と「聖神」の証人として、「出て」言って教会の終わりなき伝道を始めなければなりません。聖体礼儀は旅の終わり、時の終わりです。そして今その終わりが始まりとなります。不可能であったことが可能になります。この世の時はすでに教会の時、救いの時となっています。

(A.シュメーマン『世のいのちのため』新教出版社、から引用)

ハギア・ソフィア大聖堂の升壇(アンボ)



Tasting Heaven on Earth, W. D. Ray

コンスタンティノープルのハギア・ソフィア大聖堂の内部です。至聖所は簡単な柵のようなもので囲まれているだけです。升壇（アンボ）は左図のように中央が階段状に高くなった台で、ここから聖書などが読まれました。6世紀ごろ、司祷者（主教）は至聖所を出て、アンボの外の会衆の中で祝文を唱えてそのまま退出しました。後に修道院の習慣が加わり、一旦至聖所に戻る形になりました。

参考文献
『奉神礼』トマス・ホプコ著、
西日本主教教区発行
『ユーカリスト』
A.シュメーマン著、新教出版社

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

http://www.orthodox-jp.com/music

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○　東方正教会の聖歌　*http://www.orthodox-jp.com/maria*

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○　正教会奉神礼研究　***Liturgia***

http://www.orthodox-jp.com/liturgy　奉神礼や聖歌の実践資料

監修:ゲオルギイ松島雄一　編集:マリア松島純子